一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

Aちゃんはなかなかにリハツな人で、ちょっとした受験が必要な小学校にそれほど受験勉強もせずに進学しました。本人の希望で空色のランドセルをお母さんから買ってもらい、意気揚々と彼女の小学校生活は始まりました。しかし、早速そこでちょっとした事件がもちあがります。もう一人、空色のランドセルを選んだ子がたまたまいて、ランドセルの色がバッティングしてしまいます。そして、そのもう一人の空色のランドセルの子、クラスでお友だちも多く、ちょっとボス的なBちゃんに目をつけられてしまうのです。

そもそもAちゃんが夢中なのは、怪獣や昆虫で、彼女の愛読書は、『おもしろい！　進化のふしぎ　ざんねんないきもの事典』です（そのシリーズの第2弾か第3弾だったような気がします）。ですから、ランドセルの色がバッティングしたことなどは当然ながら彼女は気にも留めていません（あるいはそもそも気づいていなかったかもしれません）。

しかしもう一人の空色のランドセルの子は「空色ランドセルがかぶった事件」をきっかけにAちゃんを強烈に意識してしまったようで、BちゃんのAちゃんへの猛アタックが始まりました。早熟で社会性の高いBちゃんは、お友だちというよりは取り巻きと言ったほうがよいような同級生も何人かいて、そうした女の子も巻き込んでAちゃんの気を惹くための小さな策略が張り巡らされます。

Aちゃんにいっしょに帰ろうと誘っては、いざ帰宅の段になると今日は別の子と帰るからいっしょに帰らないと言ってみたり、大阪弁で言うなら自分になびかないなら「はみご」（仲間はずれにすること）にするぞとほのめかします。そうかと思うと急に何かをくれたりと、ともかく巧みに駆け引きをして、Aちゃんの自分への関心を少しでも大きくして、濃密な関係を持とうとするのです。しかし、そもそも怪獣と昆虫に夢中なAちゃんに対してそうした手練手管はうまく通用せず、ことごとく彼女の戦略は外れてしまいます。

ついに堪忍袋の緒が切れたBちゃんは、もっと露骨な実力コウシに出ます。何かの順番で並んでいたAちゃんが躓いてタイレツから少しはみ出して、元の位置に戻ろうとしたときに、「ちゃんと順番を守りなさいよ。」と他の自分の取り巻きの女の子たちとはやし立ててもう一度一番後ろから並ばせようとし、いやだと言って抵抗するAちゃんを無理やり後ろに行かせてとうとう泣かせてしまいます。また、別の機会にはAちゃんの髪の毛がきちんと結ばれていないのを見て、「その団子みたいな髪をどうにかしたらどう？　そんな髪で学校に来るのはみっともない。」と揶揄したりと、そういったことがくりかえされたようです。

しかし、時々は泣かされることはあっても、なかなかに気の強いAちゃんはたいていは負けずに言い返し、しかももっと別のことに夢中のAちゃんは、すぐにそんな事件のことは忘れてしまって、結局は、Bちゃんのいじわるは期待したほどのダメージをAちゃんに与えることができませんでした。

同じ方面に帰るのがBちゃんのグループだけだったので、とうとうAちゃんは一人で下校することになってしまいますが、通学電車で、たまたま怪獣好きの二年生の男の子と知り合いになり、怪獣の話で盛り上がって、いつもその生徒と下校するようになります。そうしたなかで、学校での出来事か、下校中のことかはわかりませんが、Bちゃんイッパに囲まれてなにかまたまた難癖をつけられていた時に、この男の子が「馬鹿というやつが馬鹿だ。」とか言って大声でかばってくれるということもあったようです。

そうこうしているうちにBちゃんもちょっかいを出すのを諦めて、一年生が終わった時には先生たちの配慮でクラス替えになってBちゃんとは別の（怪獣や虫好きの子どもが多い）クラスになり、Bちゃん事件はいつの間にか立ち消えになったようでした。

Bちゃんもなかなかのつわものですが、Aちゃんもなかなかのつわものです。Bちゃんのちょっかいについておおよそは歯牙にもかけず、結局はBちゃんのことをそれほど特別に意識もせぬままにスルーしてしまったのですが、そんな彼女が大泣きしてうちに帰ってきたことがありました。

虫好きのAちゃんは学校の花壇で青虫をみつけ、うちで飼おうと思って持って帰ってきました。お母さんが「青虫さんは学校の花壇でみんなと過ごしていたほうが幸せだから帰してあげなくちゃあだめ。」と諭すと、ちょっと涙ぐみながら納得し、あくる日にマッチ箱に入れて花壇に帰しに行くことになりました。

Aちゃんは、この青虫さんとのお別れが名残り惜しくて、最後に一目お別れをしようと、マッチ箱を登校途中の電車のなかで開けてしまいます。すると、青虫がマッチ箱から零れ落ちてしまい、混み合っている電車のなかでどこにいったかわからなくなってしまいました。お母さんの顔を見た途端、それまで形になっていなかった気持ちがあふれだしてしまったのか、「つぶされてしまったわ！」（この「わ」は、女の子の言葉使いの「わ」ではなくて、関西弁などで使うような詠嘆と少し怒りのこもった「わ」です）と、大声で泣きながら、彼女は訴えました。小一時間近くもなかなか彼女は泣き止まず、お母さんも困り果ててあれこれなだめすかしていたのですが、「きっと無事に電車を出て今頃はお外の花壇にたどり着いているわよ。」というお母さんの苦し紛れの慰めがなんとか効いたようで、「そうかな～」と訝しがりながらではありますが、ようやく泣き止んだそうです。

Bちゃんが採用した対人戦略をとりあえずは、いじわるコミュニケーション（略していじコミ）と呼んでおこうと思います。女の子の間では、小学一年生でも、こうしたバトルは始まっていると同僚の先生からお聞きしたことがあります。女の子にとって一〇歳というのが一つの鬼門だとも、別の児童精神科をセンモンにしている先生からずいぶん前に聞いたことがあるのですが、自分自身の臨床経験からもそれは当たっているような気がしています。いじコミによって成立する社会が一応の完成をみるのが、女の子の場合は一〇歳頃ではないか、その時に最大多数がい

じコミを習得するなかで、それに乗れない子が孤立して事例化することがあるのではないかとも考えられます（男の子同士の場合はこれよりもかなり遅れて、暴力を含むもう少し非文化的なかたちで、発現するのがテンケイと考えられます）。

いじコミというのは、適度な量のいじわるをお互いの社会的カイソウ（子ども社会のなかでの大げさにいえばスクールカーストのようなもの）や個人的力量に応じて小出しにジャブ打ちしながら、自分の子ども社会における立ち位置を決めていく技術のことです。たぶん、幼稚園の終わりか、小学校の低学年では、Bちゃんのように早熟な子はもうじゅうぶんにそれを意識しながら行動しはじめていて、自分が何をしたいかが、他人が自分をどう思っているのかよりも主要な関心事になるADHDやASDの傾向のある子は、だんだんとこのいじコミの世界からはじきだされてしまうことになるのでしょう。

上手にいじコミすることは、［　X　］を避けて［　Y　］を保つという点では相当に文化的なイトナみともいえます。京都や英国など長い伝統的な文化がはぐくまれているチイキでは、鋭敏な感性がないと察知できないいじコミ力を養わないと一人前の市民とは認知されないといったこともあり、洗練されれば高度な対人スキルに仕上がるコミュニケーション技術の側面があるように思われます。

（兼本浩祐『普通という異常　健常発達という病』による）

＊注　ジャブ打ち――言葉による軽い攻撃や牽制（もとはボクシングでの戦法）。
ADHDやASD――それぞれ「注意欠陥多動性障害」、「自閉症スペクトラム障害」を略した言い方。

問一　――線部A～Iのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　――線部1「彼女は気にも留めていません」とありますが、それはなぜですか。理由を答えなさい。

問三　――線部2「そうした手練手管」とありますが、それはどのようなことですか、答えなさい。

問四　――線部3「先生たちの配慮」とありますが、「先生たち」はどのように考えたのですか、答えなさい。

問五　――線部4「大泣きしてうちに帰ってきた」とありますが、「大泣き」したいきさつを百字以内で説明しなさい。

問六　――線部5「きっと無事に電車を出て今頃はお外の花壇にたどり着いているわよ」とありますが、この発言にはお母さんのどのような意図がありますか、答えなさい。

問七　――線部6「女の子にとって一〇歳というのが一つの鬼門だ」とありますが、それはどのようなことを言っているのですか。問題文中の言葉を使って答えなさい。

問八　文中の［　X　］・［　Y　］に入れるのに最も適当なものを次のア～カからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　一時的な友情　　イ　強制的な支配　　ウ　社会的な関係　　エ　絶対的な自由　　オ　直接的な暴力　　カ　物理的な距離

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三月半ば、軍艦島上陸のために長崎へ降り立った。はるばる北海道からのツアーなのだが悪天候で上陸が叶わなくても振り替えはしないという。

1半ば賭けにも似た旅の途中、明日の天気予報を見ればどれも「雨」とある。上陸出来なくても、遠巻きに島を一周するというのだけが慰めで、それでもいいと言ってはいたが旅行代金は北海道から夫婦ふたりで八万円だ。上陸したい。口に出せば叶うだろうか、いやここは祈ろう。

行ったり来たりの思いと祈りが通じてか、2翌朝は眩しいほどの快晴、海はべた凪だった。

現地には軍艦島クルーズの会社が数件あり、上陸時間は限られている。港と島のあいだは常に船が行ったり来たり。船に乗り込み、どんどん近づいてくる島影は、なんとなく軍艦に見えなくもない。DVDやテレビ番組などで見知った島影とはちょっと違う。それもそのはず、軍艦に見える絶好の撮影ポイントというのは、ぐるりと回り込んだ沖からのものだった。

そして上陸――廃墟好きが高じて、とうとう軍艦島まで来てしまったと思った瞬間、3旅行代金が頭から消えた。

上陸後はガイドさんに案内されながら、島にまつわるお話を伺う。船着き場のすぐそばには、一週間前に高波で倒れ、手が着けられない状態だというコンクリートの壁があった。島は絶えず変化している。歩いて見学が出来るのは炭鉱の建物があった側だという。坑道の入り口に続く階段が青空の下、露出している。

ガイドさんがゆっくりと静かに話す。

「この坑道入り口から入った人と、無事に出てこられた人の数は一致しないのです。」

北海道にも複数の炭鉱があったし、生まれ育った釧路にも数年前まで炭鉱が存在していたというのに、廃墟だ廃墟だと逸る心に、ついそうした現実は埃を被って眠ってしまっていたらしい。4

ガイドさんの言葉にはことさら切々とした感情は込められておらず、それゆえにこちらに伝えたいことがらの重みが伝わってくる。

現在の島は、長く個人の所有地であったゆえ残っている姿だという。

過剰な人口を支えた島の、坑道入り口、海底からベルトコンベアーで地上に運ばれてくる石炭、工場を見下ろす高い場所にあるのは重役用の住宅だ。重役の居住区から眺める長崎の夜景は、今と同じく星空のように美しかったろうか。

炭鉱に働く人とその家族が住んでいたのは、沖を望む海側だったようだ。いま上陸見学できる場所は、島民の住宅建物から五十メートルほど手前まで。当然、生活空間だったところには入ることができない。いちばん見たいものは遠くから眺めるのみ。

ビデオを観れば、島を去る際に持ち出されなかった家具や家電、人形や生活道具がそのままの場所に残っている画像が出てくる。

上陸して目にする物はみな、呼吸をしていなかった。すべてが過去形、すべてが無機物。そんな言葉が頭に浮かび、通り過ぎて行く。空の青さが疎ましくなってきた最終地点で、ガイドさんが言った。

「週末になると、たくさんの方々がこの島を訪れます。炭鉱のあたりをご案内しているときは気づかないのですが、島民の住宅部分が見えるこまでやってくると分かるんです。百人二百人というみなさまを一度にご案内するのですが、毎回おひとりかおふたり、ここで写真も撮らなければ驚きもせず、黙ってアパートを見つめている方がいるんです。そんなときは『すみませんが、もしかして。』とお声がけいたします。今まで外れたことはありません。十人お声がけすれば十人が、元島民あるいは島民のお子さんでした。」

5 軍艦島上陸ガイドはそのお話で締めくくられるのだった。スマホ片手にわぁわぁ言いながら画像を撮っていた手がだらりと下がる。

正直なことを言うとあのとき、文章では伝えきれない風のにおいを嗅いだ。

決して、物見遊山で行くなと訴えているわけではない。一度観て損はないし、是非ともあのガイドさんと過ごす時間を体験して欲しいとも思う。己の文章表現の拙さを棚に上げつつ「いっぺん観てみて。」と。

ビデオには映らない「何か」があるからこそのガイド付き上陸なのだろう。持ち帰る感情はひとりひとり違っていいのだという包容力が、ガイドさんの口調をより平坦なものにしていた。

（桜木紫乃「軍艦島にて」による）

＊注　軍艦島――長崎市にある端島の通称。

問一　――線部1「半ば賭けにも似た旅」とありますが、このように言えるのはなぜですか。理由を説明した次の文の［　　］に入る言葉を自分で考えて答えなさい。

旅行の目的がかなうかどうかは［　　］であるから。

問二　――線部2「翌朝は眩しいほどの快晴、海はべた凪だった」とありますが、これは筆者にとってどのようなことを意味しますか、答えなさい。

問三　――線部3「旅行代金が頭から消えた」とはどういうことですか、答えなさい。

問四　――線部4「そうした現実」とありますが、ここで筆者が言っているのは、「炭鉱」のどのような「現実」のことですか、説明しなさい。

問五　――線部5「軍艦島上陸ガイドはそのお話で締めくくられるのだった」とありますが、この話を聞いて、筆者は軍艦島をどのようなところだと感じるようになったのですか、答えなさい。

問六　――線部6「ガイドさんの口調」とありますが、ガイドさんの語りはどのようなものだったのですか。本文全体をふまえて答えなさい。

＊問題は四枚目に続きます。

三　次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

夜の舟　　細見和之

午前二時
私が寝ようとしていた矢先である
「タウ！」の叫びとともに
娘は飛び起きてひとしきり泣いた

二歳になった上の娘はプチ反抗期で
何ごとにも「タウ、タウ」（　　、　　）を繰り返す
夢のなかでまでいったい何を否認していたのか
娘の泣き声に
さきに休んでいた妻も起き出して
[1]長い夜がはじまった

娘を抱いて妻があやしはじめる
「船だよ、船だよ」――
娘はすこし落ちついてきたようだ
それを見て妻が調子をあげる
「船だよー、おっきな船だよー」
「タウ！」
娘の言葉がピシャリと放たれた
船はどうやら小さいようだ
「じゃあ、モーターボートだ、エンジン全開！」
「タウ！」
エンジンもいけないらしい
[2]娘はいまでは泣き出しそうな気配だ
これで生まれたばかりの下の娘まで泣き出せば
妻の小舟は阿鼻叫喚である

妻は右手でオールを漕ぐ仕草をしながら問いかける
「どこ行こう？　バータンとこ？」
「タウ！」
「コウくんとこ？」
「タウ！　タウ！」
いずれもあまりに近場である
そこで私が寝酒に酔った口を挟む
「東京のアーちゃんとこー？」
「タウ！」
「アメリカは遠すぎるよ、アメリカは遠すぎるよ」
妻が心細げに口走る
二歳の娘に「アメリカ」が分かるはずがない
彼女もだいぶ疲れて混乱していたのだろう
けれども
私が覚えているのはそこまで
あえなく私は[3]睡魔の海に攫われてしまった

目を覚ますと
眩しい光を反射して
むっちりとした娘の足が
私の目の前に横たわっていた
[4]行く先不明の妻の舟は
それでも
[5]朝の港にたどりついていた

問一　二か所の［　　］には、同じ言葉が入ります。その言葉を考えて答えなさい。
問二　――線部1「長い夜がはじまった」とありますが、「長い」と感じるのはなぜですか。理由を答えなさい。
問三　――線部2「娘はいまでは泣き出しそう」なのはなぜですか。理由を具体的に考えて答えなさい。
問四　――線部3「私は睡魔の海に攫われてしまった」とありますが、これはどういうことを表現していますか。これについて説明した次の文の［　A　］［　B　］に入る言葉をそれぞれ答えなさい。
［　A　］という語からの連想で「睡魔」を「海」にたとえ、［　B　］ことを表現している。
問五　――線部4「行く先不明の妻の舟」とありますが、これは妻のどのような様子を表していますか、答えなさい。
問六　――線部5「朝の港にたどりついていた」とはどういうことですか、答えなさい。

令和六年度　灘中学校入学試験問題

国語　二日目　五枚のうちの五枚目

受験番号

◎解答に字数制限のある場合、句読点などの記号も字数に数えます。

一

問一		
G	D	A
H	E	B
I	F	C

（み）

問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八
						X
						Y

二

問一	問二	問三	問四	問五	問六

三

問一	問二	問三	問四		問五	問六
			A	B		